

疫病よけ？

江戸時代の人魚の絵にぬりえしよう！

解説

江戸時代のおわりごろ、一八三六(天保七)年に行われた、「人魚」の見世物の引札(案内ちらし)です。口上(説明文)によると、この「人魚」は、「松前のおく蝦夷」の漁師が捕まえてミイラにしたもので、後に「能登の国」(現在の石川県)の人の手にわたって、とある神社に寄進され、その神社の座敷にて一般に公開されることになったようです。どこの神社か、いま一つはつきりしませんが、「当座摩の御社」とあるので、現在の大阪市にある坐摩神社かもしれません。

また、口上には、「人魚」を一度見れば、第一に長寿になる、福徳が増し、疫病にかからないという、いにしえよりの言い伝えがあると宣伝されています。江戸時代には、めずらしい動物の見世物がしばしば行われていますが、それらの引札でも長寿や疫病よけといった「御利益」がうたわれることが多く、ある種、お決まりの文句だったと考えられます。

ちなみに、江戸時代おわりごろから明治時代にかけて、日本国内では数多くの「人魚のミイラ」が作られ、欧米に輸出されていたことも知られています。現在、国立歴史民俗博物館には「人魚のミイラ」が所蔵されています。当時の製法を参考に、近年再現製作されたものですが、小さなサルの上半身と、大きめのサケの頭から下の部分が用いられています。この蝦夷地で捕らえられたという「人魚」も、そうした作り物だったのかもしれませんが。

さあさあ、みなみなさま、世にも珍しい人魚の絵に、好きな色をぬって、おうち飾ってみませんか？



あつひ法をよのほ一後ふゆむてつひ関り時ハ
第一長寿ふーを福徳増長し疫病と
くわらぬといふへくくをけりりりりり

(原文)
……………一たび関する時ハ、
第一長寿にして、福徳を増長し、疫病を
うつらずと、いにしへより言つたへり…
(現代語訳)
一度見ると、第一に長寿になる、福徳が
増し、疫病にかからないという、いにし
えよりの言い伝えがあります。

*もともとの資料は、
「人魚の図」(一八三六(天保七)年刊/木版)
「北海道博物館蔵弥永コレクション」です。

謹白

抑、此人魚の儀ハ、宝曆七癸酉年、奥州松前のおく蝦夷の
 漁人某、ある時海上はるかの沖へ漁に出しに、何やらうかみ
 出るものあり、よくよく見るに、其丈三尺余り、物身ハ魚ニして、
 かしらハ小児のごとく、あまり不思議のものゆへ網をひかんと
 するに、彼魚、手を合せ、かしらをたれ、侘するさま、あまり不便
 おもひ、たすけ帰せしに、さハなくて大に悪口いたし逃行さま、
 言語さながら人間に異ならず、彼漁師、大に立腹して
 網を入れ、引上ケ、諸人に見せしむるに、是なん、
 世にいふ人魚ならん、あまり珍らしき魚なれば、
 其後乾物となし、かの漁師の家に留まれ
 ども、辺鄙の事ゆへ其俣なりしに、去ル天保
 巳年、能登の国の某、諸用ありて彼地へ
 わたり、はからざる因縁に右の人魚を交
 易して所持いたされしを、此度当処
 遊歴のついで持参いたし、尤、当座摩
 の御社へ志願の儀にて寄進の望もこれあり、
 且ハ先年当御座敷にて御覧に入候例にならひ、
 こたび、諸君子の御一覽に備ふ、尤、一たび閲する時ハ、
 第一長寿にして、福德を増長し、疫病を
 うつらずと、いにしへより言つたへり、よつて
 各被仰合、賑々敷御来駕被成下候得は、
 寄進の一助とも相成、願主の幸と、
 催主の銘々ともに、諸君子の高評
 をこひねがふになん、

天保十亥年四月

謹んで申し上げます。

この人魚は、宝暦七年（一七五七）、奥州松前の奥にある蝦夷地の漁師が捕まえたものです。漁で沖に出た時、何やら浮かび出るものがあるので、よく見てみると、体長は三尺（約九〇cm）ほど、体は魚で、頭は小さな子どものようでした。あまりに不思議なものだったため、網を引こうとしましたが、この魚が手を合わせて頭を下げ、許しを乞うような様子だったので、不憫に思っ助けて帰したところ、大いに悪態をついて逃げていこうとしました。その様子は、まるで人間と異なることがあります。漁師はとても怒り、網を入れて捕まえました。いろいろな人に見せたところ、これは世にいう人魚であろうとのことでした。あまりに珍しいので、漁師は、その後、ミイラにして、家に置いていました。しかし、蝦夷地は辺鄙な土地なのでそのままになっていたところ、天保四年（一八三三）、用事があつて蝦夷地に渡った能登の国の人があひよんなことで交易で手に入れました。その人が、この度、この地に遊歴したついでに持参し、信仰を寄せている、この座摩の御社に寄進することを望みました。そこで、先年この座敷で見世物を催した例にならない、このたび、みなみなさまのご一覽に供したいと思ひます。この人魚には、一度見ると、第一に長寿になる、福德が増し、疫病にかからないという、いにしえよりの言い伝えがあります。お誘い合わせの上、ぜひご高覧ください。そうすれば、寄進の一助となつて、寄進者の幸いにもなります。主催者一同、みなみなさまのご高評を強く願つています。

天保十年（一八三九）四月